

食ふ顔はかがやきてこそ小鳥来ぬ

藤田湘子

偏食の私は、どんな物でも美味しそうに食べられる人が羨ましい。まして耀くように食べられるならどんなにか幸せだろう。

太平洋戦争時代を生き抜いた世代の人たちは、概して食べ物に文句を言う嫌な顔をする。食べられるだけ幸せなのだと。湘子も戦後、池袋に舞いもどり焼跡を彷徨していた過去がある。衣食住にもこと欠いていたのだ。

その後、六十年。何度も大病を患い生還する。七十八歳の秋には、「手術経し腹の中まで秋の暮」と達観し、食事を殊の外大切にしたのである。

自宅の庭に「小鳥来ぬ」のささやかな喜びが、病後の湘子をどんなに励ましたことだろう。

2004年 (H16) 第十一句集『てんてん』 鑑賞・轍郁摩